

悪夢のシベリアを偲んで

島根県 吾郷 信夫

私は昭和十九年十二月十日、浜田連隊に藤部隊要員として入隊しました。一週間後、中支にある本隊と合流すべく浜田より博多・釜山・山海関を経由し中支の南京に昭和二十年元旦に到着しました。そのときの装備は、軍服・戦闘帽・巻脚絆・地下足袋・帯剣・雑のう・柳行李・竹水筒・小銃は四人に一丁といういでたちでした。中尉をはじめ軍曹・上等兵等の引率で南京の紡績工場のようなところ（下関）に集められました。初年兵のみの部隊約二百人だったと思います。本隊は武漢三鎮の先の宜昌に駐留で、揚子江を船で追及するのはアメリカの飛行機の的となり危険だから行軍でないのだめのことで、約半数の元氣者を選抜し三月ごろに出発しました。自分は残った組で演習をしたり、紫金山のふもとで戦車壕を掘ったりしていました。

六月ごろ本隊が関東軍編入で満州防衛になったとて、また貨車に乗り中国東北部の四平街近く公主嶺の戦車隊兵舎に入り初めて本隊に合流、もちろん先に行軍した連中も来ていました。そして近くの小山を陣地としてソ連兵が攻めて来たら死んでも迎え撃て、そのための一人壕を自分の墓穴だと思って丁寧に掘れということでした。八月十五日、本日は重大発表があるから兵舎に帰るようにとのことで終戦を知りました。四平街で武器返納をし楊木林の部落に宿営していましたが、ソ満国境で日本軍が壊した鉄橋の修理をしてから日本に帰るとのことで、貨車に持てる限りの食糧はもとより衣類を背負って出発しました。

忘れもしませんが、国境のプラゴエシチエンスクで天幕設営をしているとき、直径三センチもあるひょうが降ってきて天幕も倒れ、我々も痛くて居り場に困りました。九月十二日のことです。（私の住んでいる平田薬師の祭礼の日と記憶しています。）これは大変なところに来たもんだなあと思ったものです。しかし、それからがもっと大変なことだらけでした。貨車で約

二十日、カラカンダというところに着きました。カラカンダは北緯五十度で樺太の国境線と同じです。また周囲四十キロの砂漠、冬はマイナス四十度まで下がり地下十メートルは凍ることです。持てる限りの荷物を担いで貨車を降り約三十分ほど歩いて収容所に着きました。広場に集合、隊長の号令で全員五歩前、そして挨拶、ふと振り返って見ると一切の荷物がきれいになくなっていました。「ええ」もうどうにでもなれです。ロシアの言葉もわからず、何をさせられるやら何が何だかというより、何も考えが浮かばないといったところです。でも建物はコンクリートでペーチカもありましたが、高い塀と四隅に監視のための望楼があり、ソ連兵がマンドリン銃を持っていました。

身体検査をして労働の軽重を決めるのですが、至って簡単、女の軍医の前で順に裸になり（もちろんパンツもぬいで）体を見、後ろ向きになってお尻をチョツとつまんで終わり、Aが炭坑作業、Bが地上作業、Cが炊事ほか軽作業といったぐあいです。私は一番若手ですから、当然A作業それも特Aとなつて、炭坑の中

でも一番厳しいブッチキスをやらされました。これは石炭を掘り出し終わつたところの跡地を急に崩れないように補強する作業です。絶えず落盤するし、ミシッミシッとバラバラとドンとの音しか聞こえない真つ暗やみ、天井と地上が三十センチもないような道をくぐり抜け、柱を立て石積みをして回るという作業です。

三か月ぐらいで石炭掘りの方に変わりました。日本の炭坑がどんなものかわかりませんが、高さ約二メートル長さ約五十メートルぐらいの石炭の壁（層）に発破をかけ、その石炭を鉄板の幅五十センチ長さ二メートルのものを縦に並べたコンベアをモーターでゆすつて石炭をズリ落とし、ワゴン車に積むわけです。ソ連人もなかなか考えたもので、石炭掘りのスコップの柄が長く皿が軽いのが五丁、柄が短く皿が重いのが五丁、十人一組で地上より約二百メートル、ランプの明かりをたよりに歩いて現場に行くのです。日本ならともかくソ連のためにそんなにのばせて働くことはないよと言っていました。作業のノルマを超えると黒パンの枕のような大きいのと砂糖等の特別食がもらえること

もあつて、先を争つて駆け足でそのスコップを取り合
いするようになりました。坑内には監督以下數十人來
ていましたが、監督以外はほとんど囚人でした。ウク
ライナで汽車の運転をしていたが列車を遅らせたこと
が四、五回あり、十年の刑で来ているとのことで、わ
ずかなことでシベリヤ送りになった人がたくさんいた
と思われまゝ。ロシア人の女も一緒に働いていました
が、まことに体格がよく力持ちで、一抱えもある石炭
を我々が二人がかりで持ち上げるのを軽々とコンベア
に運んでくれたこともあります。これらの人たちは人
種差別なく我々にも親切にしてくれました。

さて、寒さについてですが、現在我々が使っている
冷蔵庫の中の冷凍室はマイナス五度から十度の間で
す。鮮魚の瞬間冷凍はマイナス三十度とのことです。
私のいたカラカンダではマイナス三十五度を体験しま
した。ちょうどそのころは地上で炭坑で使う機材を貨
車から降ろす作業をしていましたが、フェルト製の長
靴にボロ布切れを二、三枚巻きつけて履き、一時間作
業をすると靴がカチンカチンに凍ります。小屋で靴を

ぬぎ一時間半かけてボロ布切れを干さないと凍傷にな
ります。体で一番早く鼻と耳たぶが白くなって血行が
とまり凍傷となります。お互いが注意し合つて手でも
みつこするわけです。思い出しましたが、炭坑の地下
は冬でも平均プラス十八度ほどですから、作業衣上下
で整列して炭坑に行くときソ連兵の点呼があります。
我々は四列縦隊で端の者の番号で人数を知りますが、
彼らには通用しません。五列縦隊にし、前から後か
らの二人がかりで各人の肩をたたきながら数えて、二
人で話し合い、また肩をたたき始めるのです。薄着の
上に時間がかかるので、我々はお互いの顔をみつめ合
い、鼻、耳に注意したものです。

話が前後しますが、食事と日常について話しますと、
朝は七時から食堂（別棟）で黒パン（日本の四枚切れ
一枚）スープ（青いトマトの切れが浮かんだもの）中
盆一杯、コウリヤンのおかゆのときもありました。昼
は作業が終わった五時過ぎ、夜は七時過ぎに黒パンに
じゃがいもの煮込みとスープでした。この黒パンがエ
ン麦をもみとも粉にしたのをパンにしたようで、ザラ

ザラした舌ざわりにスッパイものでした。なれるにつれこのスッパさがよくなったものです。とにかくひもじくて何か食べるものはないかと話し合うのは、ぼたもち・赤飯・おやき等そのつくり方等々食べ物の話を尽きなくしたものです。

日本人はまことに器用なものでダイナマイトの針金で縫い針、導線の皮膜から縫い糸、ダイナマイトのろう紙からちり紙といったぐあい。二年目から壁新聞、日本新聞等が掲示されるようになりました。我々も日本字が懐かしく壁新聞の編集の一員になり、共産党宣言などを詳解する仕事もしていました。

その年の夏帰ることになったある日、物干し場で小学校、商業学校、軍隊、カラカンダでも一緒という友達と会い（彼は炊事員）私の冬服、彼の夏服を交換し、再会を約して帰りました。カラカンダから貨車でナホトカまで約一か月、舞鶴に上陸、我が家への到着は昭和二十二年十月十二日、氏神様の祭礼の日でした。

しかし、ひもじくて栄養失調、凍傷、事故等で不運にも死んだ多くの戦友がいます。私もその一人を見送

りましたが、土が凍ってツルハシを振るっても氷をかくようではんの少ししか掘れません。寒いし疲れているしで、いつまでも頑張ることができず、遺体の上はその氷片を乗せてお別れました。本当に死んだ人はいわいそうです。今、シベリヤ会として平田市に百十人の会員がありますが、会うごとに憶んでいる次第です。

第四十五收容所二か年の記

島根県 箱上 春市

一、終戦からシベリア收容所に至る

中支湖北省当陽、宜昌付近にありて戦っていた第三十九師団（藤部隊）は昭和二十年四月中旬夜行軍により満州へ転進を開始、七月下旬師団主力は奉天から新京の間に到着したが、八月十五日疲労こんぱいのうちに終戦となり、同月下旬武装解除、そして涙の中に軍旗を奉焼、大命によって一戦も交えぬソ連軍に従い九